

“祖国日向”と“南国宮崎”

—宮崎における観光表象の形成と変容—

関西学院大学 長谷川 司

1. 目的

本報告では、戦前から戦後にかけての観光における宮崎像、宮崎の観光表象の形成と変容について考察する。“祖国日向”と“南国宮崎”という観光表象をとりあげる。“祖国日向”は皇祖ゆかりの聖蹟観光地としての宮崎、そして“南国宮崎”は熱帯情緒豊かな観光地としての宮崎を表象する。宮崎の観光を表象という視点から歴史的に見ると、“祖国日向”から“南国宮崎”へと大きく変容していったように思われる。こうした表象の変容の転換点にあるのがアジア太平洋戦争である。戦前から戦後への変化のなかで、宮崎の観光表象はどのように変容してきたのか。本研究は、そのような問いに答えようとする試みである。

2. 方法

ルオフ（2000）をはじめ、宮崎の観光について言及する先行文献はあるものの、宮崎観光の戦前中期と戦後にかけての歴史のプロセス自体を中心的に論じるものは少なかった。そこで、本研究では、宮崎における観光表象の歴史のプロセスを具体的な資料の裏付けによる分析をつうじ明らかにする。本報告では、観光表象と深いかかわりをもつ、遊覧バス、博覧会、映画、観光景観についての宮崎県内での資料調査にもとづき考察していく。

3. 結果

宮崎の観光の歴史をたどると、1931年の宮崎名勝遊覧バスにいきつく。このバスについて、宮崎観光の父、岩切章太郎が「建国の歴史と南国情緒」と述べたように、遊覧コースのメインとなったのは、神武天皇をまつる宮崎神宮、そして亜熱帯植物が自生し南国情緒豊かな青島であった。“祖国日向”を構成する「建国神話」と“南国宮崎”を構成する「南国情緒」を確認できる。すなわち、1931年の時点において、すでに“祖国日向”と“南国宮崎”を構成する宮崎観光の要素群が出揃っていたことになる。これらの「建国神話」と「南国情緒」は、その後も繰り返し、使用し続けられた。

1933年の祖国日向大博覧会、1940年前後の聖蹟観光ブーム、宮崎における観光は、1930年代から40年前後まで、「建国神話」に彩られた“祖国日向”を中心的な観光表象として展開していくことになった。

そして戦後、聖蹟めぐりの巡拝コースは南国情緒ゆたかな日南海岸となり、宮崎の南国性を強調する映画が制作され、1954年には南国宮崎産業観光大博覧会が開催された。戦前の観光表象において、「南国情緒」は「建国神話」の背後にあった。それが戦後においては「建国神話」に代わり、「南国情緒」が前面に表れるようになったのである。観光要素群のあざやかな連動によって“祖国日向”であった宮崎は“南国宮崎”に変貌をとげた。

4. 結論

戦前戦後の宮崎観光を通時的に眺めてみる。すると、そこに動員された観光資源は、基本的に同じものであったといえる。亜熱帯植物の自生する島、天皇家にゆかりの神社や旧跡、美しい海岸線など、これらの観光要素は戦前戦後を通じて、一貫しており、変わることはなかった。もちろん、“南国宮崎”観光の要素として新たに創られたものもある。しかし、それらの観光要素の由来を丁寧にみていくと、その基礎は、聖蹟観光ブーム時代に用意されていたものであった。

主要参考文献

ケネス・ルオフ、2000、『紀元二千六百年—観光と消費のナショナルリズム』木村剛久訳、朝日新聞出版。